

足を使い、経験する

私は2017年4月から仙台厚生病院で消化器内科後期研修医として勤務している。私は専門的な技術を身につけるとともに、広い視野を身に付けたいと考えている。そのためには足を使い、行動し、多くのことを経験することが重要だ。

仙台厚生病院消化器内科は食道、胃、十二指腸、大腸の早期がんの診断や治療において全国でトップクラスの実力を持つ。診断や治療のプロが多く集っている上、治療数、検査数が多いために若手が経験を積む機会も豊富だ。年間の内視鏡検査の総数は2万件を超え、300例以上の早期の胃がん、食道がんを内視鏡で治療している。私も今年4月から11月までの8カ月間で700件超の内視鏡検査をした。初めは胃や大腸の模型で練習し、胃カメラを自分自身が飲み、内視鏡検査の負担を体感する。患者さんの検査を担当するようになってからは、実際に指導医が患者さんに声がけしている様子、内視鏡を操作している場面を見ながら、技術を学んでいく。内視鏡診断学は非常に奥が深く、がんの診断や、病変の組織の病理を理解することは一朝一夕ではできない。少しずつ学んでいる。

患者さんとの付き合い方のノウハウも学ぶ。指導医から「朝、腹部超音波を携えて回診する」というメソッドを教わった。若手の消化器内科医は腹部超音波検査も満足にできないことが多い。かつ、忙しくなると患者さんとのコミュニケーションもおろそかになりがちだ。現在では、朝病棟を回診しながら、多くの患者さんにベットサイドで超音波検査を行う。患者さんと一緒にいる時間も長くなり、情報共有も行える。超音波検査の技術も磨け、よい方法である。

仙台厚生病院は人材への投資を重視しており、そのため学びの機会も多い。循環器、呼吸器、消化器に診療領域を絞り、高度医療を提供している病院であり、例えば循環器内科医31人、消化器内科医18人、呼吸器内科医は

仙台厚生病院消化器内科
研修医

齋藤宏章氏



16人も在籍し、PCI件数、胃の内視鏡治療件数は全国10位以内の実績を収めている。こうした実績は「選択と集中」という基本方針のもとで達成されており、このような方針をとっている病院は全国でも数少ないと思う。

私自身、本年度は6月に中国の大連市中心病院を、10月にスペインのPuerta de Hierro Majadahonda大学病院と2回の海外病院の訪問を経験した。前者は消化器内科の平澤大医師が定期的に内視鏡の指導に行っているところに、後者は同じく前田有紀医師がスペインでの内視鏡治療の指導会の講師に招かれた際に、同行の許可をいただいたものだ。いずれも指導医の先生の、いわば「かばん持ち」であったが、外国の医療を体感する貴重な機会となった。

私は、自分自身で世界に発信できる医師になりたいとも思っている。内視鏡の技術と同様に、論文を読み、書き、投稿する。これもまたノウハウが必要とされる技術だ。毎週月曜日には福島県相馬中央病院で坪倉正治医師が主催している勉強会に参加している。日中の診療終了後に片道1時間ほど車を運転し、会に合流する。坪倉先生をはじめ、会に参加している医師は福島県で働きながらもグローバル・ローカルに活躍している医師ばかりであり、英文での論文投稿も多数行っている。私も指導を受けながら「The Lancet」を中心にレターを投稿している。今年はすでに3報投稿したが、いずれも受理されなかった。まだまだ勉強が必要だと感じている。

駆け出しのうちにはまず、何事も経験をすることが大事だ。チャンスを生かせるよう、多くの「プロ」のノウハウを学び、結果を出せるよう取り組んでいきたい。